

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

未来のために

彌兵衛は老人や子どもと話をする度に自分の方からも、孫娘のつるのことを喋りたい気持ちを抑えきれなくて、孫娘の話が出そうになったが、つるとの約束を思い出し、言い出したいのをがまんした。

黙っていても、つるのあの無邪気な顔を思い浮かべるだけで、自然に口元に笑みが浮かんだ。おかしなもので、岩を削るだけの単調な仕事も夜が明けるのが待ち遠しくて、岩を削るための盤を持つ手にも槌を振るう腕にも力が入った。

「あの子たちのために、水害の心配など無い村を作っておいてやらなくては…」

彌兵衛はかつて祖父の家正が自分に示してくれた愛情が、このごろは理解出来る気がしていた。

数日ぶりにつるの姿が見えると、彌兵衛は柄にも無く気持ちが浮き立った。

「つる、久しぶりじゃのう。元気だったか？久しく姿が見えなかったから、心配しておったぞ。いつも、いつも、お母さんに内緒というわけにもいくまい。じいは、ずっと考えておったんじやが、お父さんの家へ来て、一緒に暮らしたらどうだ。のう、つる」

彌兵衛は、待ち兼ねて、つるに尋ねた。

「今日は、だめ。お母さんの具合が良くないわ。今日は、ほんのちょっとだけ、おじいさまの様子を見に来たんだから」



画 寺戸良信

「お父さんは、つるの家の様子を今でも見に行っておるのか？」

「うん、ときどきね」

「そうか、そうか。何か、じいに出ることはないか？」

「だいじょうぶよ、おじいさま。心配しないで、おじいさまは、きちんと岩を削るお仕事をしてね。つるが来なくても、さみしがってはだめよ。約束できる？」

つるは、まるで彌兵衛の心を見透かしたように彌兵衛の顔を覗き込み、返事を求めた。

「約束できるとも。けど、つるの顔が見られないのは、寂しいのお…。じいの方から会いに行くわけにもゆくまいし、のお」

「おじいさま、さみしがっちゃあだめ、あんまりさみしがると嫌われるんだから…」

つるは怒ったような言い方をした。

父親を待つ小さなつるに、母親が何度となく言い聞かせた言葉であろうと、彌兵衛は、つるが不便でならなかった。早くなんとかしてやらなくては…彌兵衛は心を痛めた。

「よしよし、お母さまの病気が良くなるまで、じいは、じっといい子で待っているぞ。のう、つる」

つるの頭を撫でながら、彌兵衛の胸に何か言いたい知れぬ不安が広がった。